

山村集落における文化的景観の管理と地域経営体の 役割に関する日中比較分析

—美山町北集落と元陽県土戈寨村を事例にして—

京都府立大学大学院・高田晋史

京都府立大学大学院・宮崎猛

日中の山村では、古くから親族集団を中心とした集落共同管理活動があり、それにより個々の山村における文化的景観が保全されてきた。本研究における文化的景観とは、地域の自然・歴史・文化を背景として、地元住民の生活や伝統的な産業が密接に関わり、独特の土地利用が形成及び固有の風土を表す景観のことを指す。このような、日中の山村における文化的景観の管理は、近年の経済のグローバル化等といった外部からの社会経済的な動きによって脅かされている。本研究の分析対象地である京都府南丹市北集落と雲南省元陽県土戈寨村□口集落では、このような文化的景観の管理とグリーン・ツーリズムの推進が地域経営体によって深く結び付いていることが特徴として挙げられる。

本研究の課題は、両集落の社会構造と親族集団の分析によって、既存の社会組織における公益的理念遂行上の問題を明らかにするとともに、両集落においてグリーン・ツーリズムを推進する地域経営体が果たす機能を示すことである。このため、2006年に北集落、2005年□2007年に土戈寨村大魚塘集落において全戸調査を実施した。また、北集落と土戈寨村□口集落においてグリーン・ツーリズムを推進する地域経営体の構成世帯と、すべての土戈寨村のグリーン・ツーリズム経営戸についても調査票による調査を実施した。

分析結果から、北集落は過疎化や高齢化の進展により、親族集団を中心とした既存の社会組織による文化的景観の管理機能が弱体化するところであったが、地域経営体が空き家や遊休農地等を有効活用することによって、文化的景観の管理機能を代行する役割を果たしていることが明らかになった。一方、土戈寨村では、親族集団を中心とした既存の社会組織が強固に残っており、十分に機能している。しかしながら、都市部における急速な経済発展等といった集落外部からの圧力は、集落内における個人主義の進展等の新たな問題を生じさせ、それらの問題に対し既存の社会組織は対応しきれなくなっている。そうした中で、□口集落では行政主導で地域経営体が組織され、その地域経営体が棚田の景観や哈尼族文化等を観光資源として有効活用することで、既存の社会組織が果たしていた文化的景観の管理機能を補完・向上させていることが明らかになった。

以上のことを踏まえると、両集落における文化的景観は、親族集団を中心とした既存の社会組織からグリーン・ツーリズムを推進する個人参加型の地域経営体へ管理主体を変化させることで保全されてきたと考えることができる。